

小宮正安先生

「『チャールズ・バーニー音楽見聞録』翻訳を通じて考えたこと」

七條めぐみ 愛知県立芸術大学音楽学部専任講師（音楽学）

2023年度音楽学コースの特別講座では、小宮正安先生（横浜国立大学教授）をお招きした。題目は、「『チャールズ・バーニー音楽見聞録』翻訳を通じて考えたこと」で、2024年1月29日（月）16:10～17:40に、愛知県立芸術大学演奏棟大演奏室Bにて開催された。小宮先生はヨーロッパ文化史とドイツ文学を専門とし、2020年に『チャールズ・バーニー音楽見聞録〈ドイツ篇〉』を翻訳、春秋社より出版された。そのほかの著書に、『モーツァルトを〈造った〉男 ケッヘルと同時代のウィーン』（講談社現代新書、2011年）、『音楽史 影の仕掛人』（春秋社、2013年）、『エリザベートと黄昏のハプスブルク帝国』（創元社、2023年）などがある。今回の講座では、『チャールズ・バーニー音楽見聞録』の紹介とともに、バーニーを通じて見えてくる18世紀ヨーロッパの知のありよう、音楽の存在の仕方、〈ドイツ篇〉ならではの翻訳事情などをお話いただいた。

1. 『チャールズ・バーニー音楽見聞録』について

本書は、イギリスの音楽史家・音楽教師・作曲家、チャールズ・バーニー（1726-1814）が著した『フランスとイタリアの音楽の現状 *The Present State of Music in France and Italy*』（1771年）および『ドイツ、ネーデルラントおよびオランダ共和国の音楽の現状 *The Present State of Music in Germany, the Netherlands, and the United Provinces*』（1773年）をそれぞれ日本語訳したもので、2020年に〈ドイツ篇〉、翌年に〈フランス・イタリア篇〉が刊行された¹。誕生からおおよそ250年の時を経た、待望の包括的な日本語訳の登場である。バーニーによる原書は、彼が1770年と1772年に行ったヨーロッパ大陸旅行の記録であり、現地で出会った音楽家、訪問した図書館や教会、さまざまな音楽体験に関する記述が含まれる。この旅行での経験や持ち帰った資料をもとに、

バーニーは1773年から13巻におよぶ『音楽通史（または『総合音楽史』）*A General History of Music from the Earliest Ages to the Present Period*』を編纂、刊行した。おもにこの功績でもって、バーニーは近代的な音楽史学の確立者として見なされている。

筆者は2022年度より、「音楽学研究I（音楽学コースの学部1年生が必ず受講する、ゼミの授業）」で『チャールズ・バーニー音楽見聞録』を扱い、バーニーの経歴や本書の成り立ちを踏まえた上で一部の章を読む、ということを行っている。本書を1年生向けの教材に選んだのは、西洋音楽史のある時代について詳しく書かれた書物という理由からだけではない。本書が、「歴史とは何か」「知とは何か」という「大いなる問い」を読み手に突きつける書物だからだ。

バーニーがヨーロッパ大陸を旅行した1770年代は、西洋音楽史でいうとJ.S. バッハの没後20年、ハイドンがエステルハーゼ侯爵家に仕え、若きモーツァルトは職を求めて演奏旅行を行っていた頃である。ハイドンが円熟期に入り、モーツァルトがウィーンに定住した1780年代を「盛期古典派（ウィーン古典派）」の始まりとするならば、その前の時代は「前古典派（初期古典派）」と言い表される。はたして、バッハ亡き後、ハイドンとモーツァルトが現れる前の時代について、音大生ですらどれだけのことを知っているだろうか。バーニーの著述を読むにしたいが、我々は「音楽史」がいかに「著名な」「作曲家」を中心に編まれているか、歴史を「連綿と続く人々の営み」ではなく「ある日突然別の時代へワープするもの」として捉えがちであるか、ということに直面する。そして何より、バーニーの圧倒的な「知」に対する、学問の徒としての敗北感を覚えるのである。これほど心をざわつかせる良書、『チャールズ・バーニー音楽見聞録』の訳者に直接お話を伺える機会ということで、筆者は浮足立つような心持ちで講座当日を迎えた。



図1 レクチャーをする小宮先生と受講生たち

2. 講座の内容

小宮先生のレクチャーではまず、“バーニーとは「何者」か？”という問いが寄せられた後、『音楽見聞録』から分かることが様々な切り口で語られた。とりわけ強調されていたのは、“18世紀ヨーロッパにおける「総合知」のあり方”と、“音楽と社会の相互作用性”だろう。以下では、この3点に沿って講座の内容を振り返りたい。

(1) バーニーとは「何者」か？

『ニューグローヴ世界音楽大事典』では、バーニーは「作曲家、音楽史家」として紹介され、その業績の筆頭には音楽作品と数々の著作が挙げられる。一方で小宮先生は、そのような肩書きや業績によるラベリングではなく、バーニーは「探検家」であり「社交の人」であるとおっしゃった。確かにバーニーの旅行記を読むと、オルガンの構造や劇場の座席、出会った人々の印象などが事細かに書き残され、さながら未知の世界を「探検」しているような感覚を抱く。また、目当ての資料や音楽家に到達することへの情熱はすさまじく、彼自身は決して上流階級の出身ではないものの、今でいう「コミュ力」を駆使して、貴族社会を渡り歩いていくのである。こうしたバーニーの徹底した「実体験主義」は、スマートフォンやPCで手軽に「知識」を得た気になれる現代人にとっては、耳の痛い話である。しかし、情報にあふれ、真偽の見定めが難しい現代だからこそ、現地に赴き何物にも代えがたい「経験」を得ようとするバーニーの姿勢は、心打たれるものがあるのかも知れない。

(2) 18世紀ヨーロッパにおける「総合知」のあり方

バーニーの生きた18世紀ヨーロッパは、一般に「啓蒙主義」の時代と呼ばれる。これは、中世以来のキリスト教的な倫理観・世界観から脱却し、人間の理性によって物事を把握しようとする姿勢であり、19世紀以降の近代社会を準備するものとして位置づけられる。必然的に、啓蒙主義は非常に「進歩的な」考え方と見なされるが、小宮先生は、それがあくまでも貴族社会の中で育まれたものであることを忘れてはならないと強調された。すなわち、ヨーロッパ大陸を見て回るといふ「啓蒙的な」バーニーの行為は、貴族たちの「グランド・ツアー」を模倣したもので、フランスーイタリアードイツーネーデルラントというルートすら踏襲しているのである。「グランド・ツアー」の目的は貴

族の子息たちがヨーロッパの様々な地を訪れ、珍しいものを見たり、現地の要人との社交を重ねたりしながら、上流階級にふさわしい教養を身に付けることである。バーニーが大陸で行っているのもまさに同じことで、その中で音楽に重点が置かれていると見ることができる。小宮先生曰く、バーニーは「音楽を通じて世界を把握」しようとしていた。それゆえに、彼の旅行記は「音楽＝鳴り響くもの」だけに焦点が当てられるのではなく、それが置かれる場所や取り巻く人々のことも包含する、音楽の「総合知」といえる内容である。だからこそ、彼の著作としてもっとも知られる A General History of Music は、日本では『音楽通史』と訳されることが多いが、『総合音楽史』と訳すべきである、という小宮先生の提言は、非常に印象的なものだった。

(3) 音楽と社会の相互作用性

バーニーは訪れた先々で、劇場、教会、宮廷などに赴き、そこで鳴り響く音楽を味わい、論評する。彼の記述からは、1770年代のヨーロッパで「どのような」音楽が聴かれていたかのみならず、「どのように」音楽が演奏され、存在し、享受されていたかをも知ることができる。すなわち、社会における音楽のありように触れることができるのである。それを説明するために小宮先生が引き合いに出されたのは、ウィーンの王宮での「音楽会」を描いた絵画である。そこでは、前景にはフロアにて談笑する貴族たちが描かれ、音楽家たちは後景の、バルコニーの片隅に追いやられている。現代的な感覚では、貴族の社交の場で「BGM」として音楽が鳴っているに過ぎないように思えるが、18世紀のヨーロッパではこの形こそが「音楽」の聴かれ方だったのである。そこにバーニーの記述を重ね合わせると、例えばウィーンの劇場の平土間や最上階の入場料金は「非常に安価」に設定される一方で、ボックス席は「やんごとない階級の一家のためにシーズン中貸し出されて」いたことが分かる（バーニー 2020, 171）。つまり、音楽を聴く空間が貴族の専有物であったバロック時代とは異なり、場所そのものは市民階級にも開かれるようになるが、その内部には厳然とした階級差があった。このような描写は、「上からの啓蒙」をすすめた18世紀オーストリアの社会状況と結びつき、まさに音楽と社会が切り離せない存在であることを物語るのである。

これらの内容を、小宮先生は豊富な図像資料とともに、身振り豊かに話されていた。その口ぶりから、小宮先生がなぜバーニーに関心を持たれ、『音楽見聞録』の全訳という壮大なプロジェクトに挑まれたのかが伝わってきた。バーニーの「すべてを把握したい」という欲望は、現代の研究者や「オタク」と重なるものがありながら、それよりはるかに射程が広く、同時代的な熱に満ちている。まさに百科全書時代の「総合知」を体現するバーニーだからこそ、我々は新たな「知の欲望」を喚起されるのだろう。魅力的な講座を展開していただいた小宮先生に、あらためてお礼申し上げたい。

注

¹ 正確には、日本語版は1959年にイギリスの音楽学者パーシー・アルフレード・スコールズが編集した『バーニー博士の18世紀ヨーロッパ音楽紀行 第1巻 フランス・イタリア編 *Dr. Burney's Musical Tours in Europe Vol. 1: An Eighteenth-Century Musical Tour in France and Italy*』および『18世紀ヨーロッパ音楽紀行 中央ヨーロッパ・ネーデルラント編 *An Eighteenth-Century Musical Tour in Central Europe and the Netherlands*』を直接の底本としている。前者は『フランスとイタリアの音楽の現状』と、その出版に際して削除された音楽以外の記述部分を統合したもので、後者は『ドイツ、ネーデルラントおよびオランダ共和国の音楽の現状』の改訂第2版(1775年)に基づき、スコールズが註を加えた内容となっている。また、日本語版の〈ドイツ篇〉においては、1773年に出版されたドイツ語翻訳版のみに見られる註や補遺も採録されている(バーニー 2020, 483; バーニー 2021, 587-588)。

参考文献

- スコールズ, パーシー・アルフレード, ワトキンス・ショウ 1996 「バーニー, チャールズ」 渡部恵一郎(訳) 『ニューグローヴ世界音楽大事典』第13巻: 282-285
- バーニー, チャールズ 2020 『チャールズ・バーニー音楽見聞録〈ドイツ篇〉』小宮正安(訳) 東京: 春秋社
- バーニー, チャールズ 2021 『チャールズ・バーニー音楽見聞録〈フランス・イタリア篇〉』今井民子, 森田義之(訳) 東京: 春秋社